カトリック 仙台教区報

No.243　2021年4月4日

発行：カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel.(022)222-7371　Fax.(022)222-7378
発行責任：仙台教区広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

2021年の「3.11 東日本大震災 犠牲者追悼・復興祈願ミサ」は
新型コロナウイルス感染症予防のため、平賀徹夫名誉司教 主司式のもと
非公開で行われ、祈りをささげました。

「新しい創造」計画に導かれて10年

――開かれた教会となって歩み続ける――

仙台教区サポートセンター　事務局長
小野寺 洋一 神父

2011年3月11日、東日本大震災が発生してから10年が経ちました。「千年に1度の大地震、大津波」と言われましたが、それ以上に、人類に大きな影響を及ぼすと言われている東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故が起こりました。地震、津波の被害も大変なものでしたが、放射能の影響も甚大でした。オールジャパン体制で支援活動に携わったこの10年、そして、「仙台教区サポートセンター」が3月末で閉鎖される機会に、この10年のことを、今少し、振り返ってみたいと思います。

震災直後の仙台教区は、ライフラインがすべて断たれ、ただ途方にくれていたところに、助けの手を伸ばしてくださったのが、カリタスジャパン(CJ)でした。

ＣＪの責任司教であった新潟教区の菊地功司教やＣＪの援助部会担当の成井大介師がすぐに車で、仙台に来てくださいました。ＣＪで、世界の被災地の緊急援助を体験していた人々でしたから、平賀徹夫司教と小松史朗事務局長たちと討議し、すぐに、被災の現状把握と「仙台教区サポートセンター(SDSC)」の立ち上げ、世界中からやってくるボランティア受け入れや対応、ベースの立ち上げなどの必要性について知恵を貸してくださいました。これは震災後、５日目の３月１６日のことでした。

SDSC立ち上げ当初
左から、菊地司教、成井師、谷司教、平賀司教、小松師

SDSCには、当初、成井師が事務局長となり、同じCJから２人、東京の「信徒宣教者会」から２人、さらに、大阪教区の職員・濱口一則さんも手伝ってくださいました。

主な仕事は、毎日朝から晩までひっきりなしにかかってくる電話の応対と、次々手伝おうとして来てくださるボランティアの方々への応対で１日が暮れるという有様でした。

SDSCの経験豊富で実践力のある方々が、ベース設営の必要性を説かれました。そのベースも被災地の中にある教会をベースにすることが最適で、

被災地の方々と共に住みながら支援活動ができることが望ましいということでした。そこで、まず、塩釜教会、石巻教会、釜石教会、米川教会がベースとしての機能を果たせるのではないか、ということで、ベースとなる教会の方々にご理解をいただき、ベース長、それを支えるスタッフなどが任命され、活動が本格化し始めました。

3 月 21 日、塩釜ベース設立。活動開始。
3 月 24 日、石巻ベース設立。活動開始。
4 月　2 日、釜石ベース設立。活動開始。
4 月 30 日、米川ベース設立。活動開始。

定期的に開催された「全ベース会議」

このような歩みを続けることができたのは、3 月 24 日に開催された臨時司教総会でした。この総会で、日本の教会を挙げて、仙台教区と仙台教区が進める復興支援活動を支援することが決められたことでした。

こうして、カリタス宮古ベースを札幌教区が、カリタス大槌ベースを長崎教会管区が、障がい者自立センターかまいしを名古屋教区が、カリタス大船渡ベース「地ノ森いこいの家」を大阪教会管区が、いわきサポートステーション「もみの木」をさいたま教区が、CTVCカリタス原町ベースを東京教区が開設してくださいました。

全国から担当司教が集まり
「仙台教区サポート会議」が開催された

文字通り、オールジャパン体制と言われたように、日本中のカトリック教会が力を貸してくださって、仙台教区も生き返ったように感じました。

毎月、あるいは2、3か月に1度、「仙台教区サポート会議」が開催され、東京･大阪･長崎教会管区の支援担当の代表司教たちが集まり、仙台教区が今、何を援助してほしいのか、それにどう対応するのかという具体的な話し合いが、この10 年間続けられたのです。

また、修道会から、教区から、司祭が派遣され、仙台教区で宣教司牧にご尽力くださっていることからも、信徒たちは、自分たちの教会共同体生活の中で、全国のカトリック教会が支援してくださっていることを肌で感じていました。

もう一つ、別の角度からのオールジャパン体制の支援は、「シスターズリレー」です。2011 年 4 月から始まったシスターズリレーは、日本女子修道会総長管区長会が全国の修道会の枠を超えて，各地のベースのお母さん役と活動の支援に、シスターたちを派遣してくださいました。2015 年5 月末でこのリレーは終わったのですが、以後の動きとして、ある修道会は、被災地に修道院を開設して被災者に寄り添ってくださっています。

信徒も、積極的に支援活動に加わりました。塩釜、釜石、石巻、米川の各教会がベースとなった所へ、また、教区が開設したベースに、信者さんたちがボランティアとして来てくださいました。ある人はスタッフとして、ある人はリピーターとして、何度も支援してくださいました。

個人としてだけではなく、小教区として、ボランティアグループを立ち上げて、支援活動をしてくださっている方々がたくさんおられます。福島県では、松木町教会が震災以前から生活困窮者を支援する「愛の支援グループ」を立ち上げていましたが、CTVCとともに浪江町から避難した宮代仮設住宅に住む人々に、継続して関わっています。

宮城県では、「オリーブの会」として、八木山教会と亘理教会が協働して、支援しています。

同様の活動は、各教会でなされています。仙台教区のみならず、他教区の小教区でも、支援してくださっており、その活動により、仙台教区の小教区活動が助けられ、続けることができるのです。

もう一つの新しい形は、「チーム･カリタス仙塩」の活動です。仙台市内の小教区が単独で、仮設住宅で「お茶っこ」傾聴をしていたのが、仮設住宅が閉鎖され、2016 年春に、各教会の支援グループの代表者が集まり、話し合った結果、仙台塩釜地区8教会でチームを作り、協力し合って支援活動に取り組む「チーム・カリタス仙塩」が結成され、カリタス石巻ベースなどで、傾聴の支援を中心に活動しています。

サポートセンター主催
ボランティアの講習会

当時の教皇大使カステッロ大司教に被害の概要を説明

カリタスアメリカのスタッフとサポートセンターのスタッフ

以上のような支援活動は、その支えとなった思想、考えがありました。それは平賀司教が仙台教区の復興に向かって出された**「新しい創造」基本計画**です。これは、第１期から第５期までに区切って発表されました。以下に示します。

第１期（震災発生時～ 2011 年９月 15 日）
４月 18 日発表

緊急避難所への支援、泥出し、がれき撤去など。

第２期（2011年９月 16 日～ 2013年３月末日）

仮設住宅、見なし仮設に移られた被災者の支援。仮設でのコミュニティ作りのために、お茶っこサロンなどが主な活動。この第２期から、傾聴が大切な働きの一つとなり、以後、現在も継続。

第３期（2013 年４月～ 2016 年３月末日）

仮設住宅から災害（復興）公営住宅へ移転した被災者の支援。お茶っこを通し、徐々に仮設の人々が知り合い、共同体意識も芽生えてくる。

第４期（2016 年４月～ 2019 年３月 31 日）
「寄り添い 共に」

予定されている災害（復興）公営住宅がすべて完成。被災者と「寄り添い、共にある」活動を展開。

福島では、原発被災者に対する補償や放射能について、津波被害者との間に「分断」 が生じている。

第５期（期限を設けず、長く仙台教区が目指すものとする）

今後の課題と目標として、「これからも教会の門を開き続けていましょう」。「原発事故は福島県だけの問題ではありません。関心を持ち続け、行動をしましょう」。「ベース運営、および仙台教区サポートセンターは、資金面を含め、将来を見据えて支援地域の状況やニーズに合わせて対応していきます」を掲げています。

ここで、被災時の自分の気持ちを述べさせていただきます。私は、自分がひどい地震にあい、津波の映像などが見られるようになったとき、すぐに思ったことは、神が天地万物をよいものとして造られ、「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めてよかった」（創世記１：３１）と書かれている創世記の言葉でした。その極めてよいものとして造られたものを、神は人間の手に委ねられました。しかし、人間は、自分の力を過信し、神を忘れ、人間のためだけを考えて、開発したり、発明したりしてきました。この人間の過信に対し、神はそのおごりをいましめられるために、人間がその過ちに気づいてくれるようにと、今回の震災を起こされたのだと思いました。

神がノアの時代、40 日におよぶ洪水の後、ノアに新しい大地に生きるように促されました。出エジプトの時もそうでした。紅海を渡ったイスラエルの民に、約束の地で神の民として新たに生きるようにと望まれました。

バビロン捕囚のイスラエルの民は、苦しい生活の後、エルサレムに戻ることができましたが、そこで、新しい神殿を造らなければなりませんでした。

そう考えていくと、私たちにも、この困難な中から立ち上がり、新しく生きるようにと言ってくださっているのだと感じていました。

この程度しか考えられない私に、「新しい創造」という基本計画が示されました。この基本計画が出されたことによって、2011 年は「新しい創造元年」ととらえられました。パウロのコリントの教会の信徒に宛てた手紙の中のこの言葉は、キリストと一致し、キリストを中心にして生きている人はキリストによって「新しく創造」された人だと言っています。

平賀司教は、次のようにおっしゃっています。「仙台教区は、広い被災地と被災されたたくさんの人々を視野に置きながら、その中でも特に『谷間』に置かれた地域やそこで暮らす方たちの心を生き、励まし、つなぎ、支え、寄り添う教会であることを望みました。日々キリストと結ばれ、新しく『創造された者』として支援活動に携わりながら、支援する側、される側の壁を取り払い、『主においてひとつ』となることができると考えたからです」と。

この「新しい創造」計画は、確かに、日本の教会を新しく創造したと思います。

「新しい創造」計画は、この10年間を通し、信徒だけのための教会ではなく、その地域全体の人に奉仕するカトリック教会となりました。地域の人々は、そんな私たちを、皆さん好意をもって「カリタスさん」と呼んでくださいます。これが、「新しい創造」計画が生きている１つのしるしだと思います。

キリスト教を知らない人が、ボランティアに来て、教会の信徒やベース長やスタッフと出会い、活動を通して、また共に食事をすることを通して、何かを感じて、笑顔になり帰っていきます。「また、カリタスさんの所へ来ます」と言いながら。

ボランティア生活をするうちに、何かを感じ取り、帰宅してから教会に通い、洗礼を受けた人もいます。

信徒として、ボランティアに入った人の中には、修道会に入会した人も、司祭を目指して、神学校に入り生活している人もいます。

地震と津波の被災地は、まだ復興に１０年はかかると言われています。一方、福島の原発事故の被害の実体は、まだ完全には明らかにされていません。その上、復興については、先が見えない状態です。日本は、広島、長崎という原爆を体験しましたが、今また福島での原発事故による、放射能を浴びることになったのです。

被災者として、私たちのできること、それは同じ被災者に寄り添って生きることだけです。この地震、津波、原発事故をとおして、主は私たち一人一人に何を伝えようとなさっているのでしょうか。

復活の主が、力強く、この東北の大地におりたってくださいますように！そして、日本の大地全体に、おりたってくださいますように！

仙台教区サポートセンターでは、復興支援活動の歩みをまとめた記念誌
「東日本大震災・福島第一原発事故から10年　わたしたちの10年　そしてこれから」を発行しました。
オールジャパン体制での取り組みの流れ、カリタスベースや小教区、修道会、さまざまなグループやボランティアのふり返りをまとめています。

寄稿してくださった皆様へ、この場を借りて御礼申し上げます。

この本は、小教区、修道院、学校へお届けしています。ぜひお手にとってじっくりとご覧ください。

仙台教区サポートセンター　濱山 麻子

教区の諸活動

第8回いのちの光 3.15フクシマ

「3.15から10年、フクシマが背負ってきたもの伝えつづけるもの」

「福島の現状について」
～飯舘から見え、考えてきたこと～

第8回いのちの光3.15フクシマ講演会が、伊藤延由さんを講師に迎えて3月13日、元寺小路教会大聖堂で行われました。伊藤さんは、2010年に農業研修所「いいたてふぁーむ」の管理人兼農民として入植していた矢先、福島原発事故により避難をよぎなくされました。以後、飯舘村の環境放射能測定を続けながら、現地の実態を発信しつづけています。以下に、伊藤さんの論旨を要約します。

当初は、事故の正確な情報が住民には、伝えられなかったのです。3月14日に村にこつぜんとしてモニタリングポストが設置され、翌日の午後３時過ぎに１時間当たり 44.7 マイクロシーベルトという値が検出されました。3月15日の午前中までは、陸から海に風が吹いていたのですが、その日の午後に風向きが海から陸へと変わりました。その結果、飯舘村で高い線量が検出されたのです。当初は、この値がどんな意味を持つのかは住民には分かりませんでした。この値は、通常の空間線量の千倍の値でした。実は、国は SPEEDI という原発事故などが起きた時に、周辺環境における放射性物質の大気中濃度や被爆線量を予測するシステムを稼働させていました。国は、この情報を見ていて、3月15日に風向きが変わって飯舘村で高い線量が検出されると予想したので、モニタリングポストを設置したのです。SPEEDI の情報は、米軍や県には伝えられていました。今回の事故は、そのような国の不作為というより犯罪的行為が大きな影響を与えました。この後、４月になると突然、年間 20 ミリシーベルトになったので子どもと妊婦は避難した方が良いとの働きかけがあったのです。しかし、被爆リスクの説明は一切ありませんでした。きちんとした説明がないものですから、避難が遅れ全員が避難したのは８月頃でした。その頃、国は「リスクコミュニケーション」という

言葉を使い、放射能の危険とタバコ・飲酒のリスクを比べて提示するなどして、原発事故の矮小化（わいしょうか）に努めました。

現在、飯舘村の住民の約７割の人が帰還できない状況です。ですから、国が考えるべきは、この７割の人の生活をもとに戻すことを含めての復興策でなければなりません。しかし、国が示したのは除染と帰村だけです。この除染なのですが、仮置き場に３年程度置いて中間貯蔵施設で 30 年かけて減容化して最終処分場は県外と国は言っています。除染の仕方は、農地は５センチ剝ぎ取ってきれいな砂を５センチかぶせるなどして、回収した土などをフレコンバックに詰め込みます。１ヘクタールの農地から約千トン廃土が出ます。福島県全体で 2200 万袋あります。これだけ多くのものをどこが最終的に引き取ってくれるでしょうか。

私は、除染には効果と限界があると考えます。現在のところ、除染には４千億円かかると考えられています。しかし、これで除染されるのは宅地と農地のそれぞれの境界から20mの範囲です。これは村全体の16％に過ぎません。これではとても被爆から逃れられません。

2017 年３月末に、計画的避難区域については、長瀞地区を除いて避難解除されました。また、道

当日、写真家 飛田晋秀さんの写真パネルも展示された

講演会は YouTube で配信された https://youyu.be/lWsg10uFhWE

の駅や認定こども園など施設は立派なものができました。しかし、開校した学校などでは、敷地の中は放射線が少ないのですが、少し離れるとすぐ高くなりますし、山の上にいくとさらに高くなります。ここが、子どもたちの学びの場として相応しいのでしょうか。

原発事故の被災者になって感じたことは、決定的なことは「加害者は救済された」ということです。損害賠償については、加害者が査定をして賠償の範囲を決めます。私は、東電の賠償スキームは理不尽と不条理の連続だったと思っています。例えば、ADR センター（原子力損害賠償紛争解決センター）は、東電に対して和解案についての拒否権を与えました。その結果、被害者が本訴して損害回復するしかない状況が生じています。

上野 隆（仙台西教会）

パンデミックの最中で実現した 楽しい「青年会クリスマスの集い」

2020 年は私たち全員にとって厳しい年でした。けれども、収束のめどが立たないこのパンデミックの真っただ中で、多くの課題がありながらも、仙台青年グループは祈りと音楽を通して希望と励ましのクリスマスメッセージを送りました。

若者グループは、Covid-19 新型コロナウイルスのまん延を防ぐために、3つの C（狭いスペース、混雑した場所、密接な接触）すべてに配慮しながら有意義な方法でクリスマスを祝うことができました。

昨年12月26日、仙台青年会はクリスマス集会を開催しました。日本人をはじめ、さまざまな国の若者たちが一堂に会し、交流し、楽しいクリスマスを祝うことができました。聖なるミサが始まる前に、30分ほどの短いクリスマスコンサートがありました。さまざまな国籍の若者が、自国の伝統的なクリスマスキャロルを演奏しました。それは、実に心温まる楽しい雰囲気でした。

私が、仙台教区青年育成部の部長に選出されたとき、どうしたらいいのかわからず、戸惑いました。しかし、グループの各メンバーは、私が部長の間に計画したすべての活動を実現するのを助けてくれました。この「青年会クリスマスの集い」は、まさに、共同行事でした。

仙台の若者共同体は、それほど大きなコミュニティーではないかもしれません。でも私は、グループの温かい雰囲気を一つの家族のように感じています。

このような温かく愛情のあるコミュニティーの一員であることにとても感謝しています。

仙台教区青年会会長　大野 萌二花

各地区からのお便り

第１地区より

〈本町教会〉仲間になりたい一心で

今から５年前、当時僕は仙台ダルクの職員をしていました。薬物の問題でどうしようもなくてダルクにやってきた僕でしたが、当時僕は薬物の使用も止まり、それに伴って“ダルクスタッフ”という仕事が与えられ、お給料も頂けるようになり、彼女もでき、アパートを借りる事もできて、自分自身の人生をそれなりに立て直すことができ喜んでいたところでした。

そんな中、当時の上司から「青森で、自分でダルクをやらないか？」と言われました。その時、正直僕はうれしかった。今まで頑張ってきた事が認めてもらえたんだと思ったし、独立して自分の施設を持てるというのは魅力的だったし、よしやってみようと思いました。その時にスタッフとして僕について来てくれたのが、当時すでに洗礼を受けていた砥上君でした。二人で青森で施設をする準備をしていましたが、まず最初にやったことは、僕たち“ダルク”を応援してくれる方を探すことでした。当然青森に知り合いなどいませんが、どなたかから「本町教会に行けば３人の女性がいるから、その方を頼っていけば大丈夫」と言われました。その３人の方というのが、神さんと奈良さんと大谷さんで、その頃からずっとお世話になっています。

その後、準備を重ね、青森市から障害者施設として指定して頂き報酬を頂けるめどをたて、今から３年半前に青森ダルクを開設し青森にやって来ました。しかし、すぐに地域住民の方からダルク開設の反対運動が起こりました。目の前に「ダルクはいらない」という看板が立てられました。青森市からも、住民の方が納得できないなら指定はできないと言われました。でも今まで応援し続けてくれたのは、教会の皆さんでした。全く僕たちを嫌がらず、ボランティアをさせてくれたり、新年会やバザー、クリスマス会など催し物にもいつも参加させてくれました。本当にありがたかったです。

そしてその中でも特に僕たちを助けてくれたのは、聖母被昇天修道会のシスターでした。当

受洗された
笹崎さん

時ダルクには入ってくるお金もなく、困り果て「少しの間助けて欲しい」とお願いにあがったところ、快諾していただきました。それも少しの間ではなく、それから「反対運動」が治まるまで２年以上ダルクを応援し続けていただきました。今のダルクがあるのも、教会や修道院の皆さんのおかげだと本当に感謝しています。

そして皆さんの愛情に包まれた僕は、そんな皆さんの共同体に入りたい、お仲間になりたいと願うようになりました。正直、「神様」も「イエス様」もわかりませんでしたが、皆様のお仲間になりたい一心で勉強を始めました。勉強を始めると、皆さんがどうして僕たちにそんなに優しかったのかが、少しずつ分かってきたような気がします。そして僕自身も、困っている人を助けていきたいと思うようになってきました。

コロナの影響で勉強期間が１年8か月と、長い期間洗礼を受けることができませんでしたが、僕にはそれだけ勉強をする期間が必要だったんだと今は思っています。そして青森ダルクも開設から２年半、青森市から指定を受けられず苦労もしましたが、それも僕を皆さんに出会わせてくれるためであったり、信仰に出合わせてくれるための神様の計画だったんだと今は感謝しています。神様がこの先、僕にどんな計画をなされているのかわかりませんが、神様を信頼して皆さんと共に歩んでいけたらと願っています。

最後に、僕と共にこの青森に来た砥上竜一くんですが、青森に来て数か月で僕との関係がうまくいかなくなり、僕の元を飛び出し、残念ながら一昨年 10 月に亡くなってしまいました。後悔とともに、彼は今も僕の心の中に居ます。皆さんにも、ぜひ彼の冥福を祈ってやっていただけたらと思います。よろしくお願いします。

笹崎　正吾（本町教会）

第 3 地区より

〈釜石教会〉メモリアル祝別

新しく設置されたメモリアルを祝別する堀江節郎神父と釜石教会信徒の皆さん

いまだに全国各地でコロナ、コロナと騒がれておりますが、各教会、神父様はじめ、信者さん方も大変苦労されていると思います。

岩手県内には 13 の教会がありますが、2 ～3 年前から、物故者の名前を誰でも一覧できる思い出のメモリアルとして、書いて欲しいとの話があり、作成しました。2020 年 12 月 6 日(日)、堀江節郎神父(釜石市出身)によるミサの後、メモリアルを祝別していただきました。このようなメモリアルは、県内初めてと思われます。

そのメモリアルには、明治 29 年 6 月 5 日の三陸大津波で殉教されたヘンリー・リスパル神父はじめ、ヨセフ･フーゲント･ブレル、ヨゼフ･シュマノル、マックス･エンデルレ、オスカー･エグロフ、舟山亨神父など、物故者はアイウエ順に記入されており、名前を見ると、釜石教会発展のため、大変苦労された方ばかりで、その方々を思い話がつきないくらいです。千坂 誠久（釜石教会）

第 5 地区より

〈石巻教会〉大変な 1 年でした

初聖体と洗礼式を終えた子どもたちと會津隆司神父

2020 年は、3月から6月にかけての公開ミサが中止となり、四旬節から復活節の典礼のほとんどにおいてともにお祈りができないこととなり、また、7月に予定されていた地区大会も中止になるなど、大変な試練に見舞われた年となりました。そうした中、8月の聖母被昇天のミサ、11 月 22 日の子どもたちの初聖体と洗礼式、12月 の 主の御降誕のミサを行うことができたことは，大きな恵みだったと思います。

パンデミックの中で、苦しんでいる人、孤立した状況に追いやられている人たちに必要な助けが届くことを願い、平和の実現を願い、ともに祈りを深めていきたいものと思っています。

大野 隆（石巻教会）

〈東仙台教会〉降誕祭のミサ

東仙台教会のプレゼピオとクリスマスツリー

今年の夜半ミサと日中ミサは、事前に参加調査への協力をお願いし、おおよその人数を把握して、密を避けてささげられました。４つの修道会のシスター方とも主日のミサを分けていただき、長らくご一緒していません。入祭唱を唱え、静かに始まり、高らかに聖歌を歌うことはありませんでしたが、拝領の時の奏楽が心にしみました。ミサに来ることのできない方々には、カードを送り、ご降誕の喜びとまた共に祝えることを祈りました。　三浦 奈々（東仙台教会）

〈西仙台教会〉子どもの祝福・降誕祭

教会の機関誌「ほしかげ」

森田直樹神父から祝福を受ける子どもたち

今年の前半はコロナ禍で、何もかも大変でした。それでも、教会総会は議案書を PDF ファイルにしてメール配信して、メールで賛否を問うやり方で開催しました。おかげで、新教会委員も無事に選出できました。西仙台では、約８割の信徒とメールで連絡が取れ、残りの信徒についても Faxで連絡できるので、いざという時には、一斉メールとFaxで瞬時に連絡をとることも可能です。困難な中、昨年の11月には「子どもの祝福」を祝うことができ、クリスマスイブのミサもささげることができ、教会の機関誌「ほしかげ」も無事、発行できた事は大きな喜びでした。　上野 隆（西仙台教会）

〈古川教会〉
共同墓参と川井啓神父様95歳誕生日ミサ

95歳になられた川井啓神父様は誕生日ミサをささげられました

昨年の10月10日、川井様啓神父様は95歳の誕生日を迎えました。

また、10月18日、古川教会墓地にて、フェルディ神父様に、古川教会の方々で、亡くなられた方々のために祈りました。

本田 敬子（古川教会）

〈塩釜教会〉受洗と降誕ミサ
受洗おめでとうございます

8月15日(土)聖母の被昇天ミサにてエリザベト村上恵美子様の洗礼式が行われました。
下記は、村上様からコメントです。

「これまでの祈り、支えてくださった共同体の皆さまに感謝申し上げます。額への冷たい聖水が心にまで届く感動が忘れられません。」

主の降誕おめでとうございます

コロナ禍で迎えた主の降誕夜半ミサでしたが、若い方も多く、心温まる静かなクリスマスミサでした。

和賀 真喜子（塩釜教会）

〈北仙台教会〉ラテン語による聖夜ミサ

コロナの影響から、今年の主日ミサは検温、手を消毒、8人掛けの椅子に3人が座る、祈る、歌う、言葉を発することは、ご法度のただ、ただ沈黙のミサにあずかる一年でした。

降誕祭夜半ミサは24日20時から信徒、求道者のみが参加する形で行われました。主日のミサより少ない人数で始まりました。俞鍾弼神父と信徒代表の独唱により、すべての祈り、グレゴリオ聖歌が厳かにささげられいつものクリスマスミサとは違う雰囲気でした。バチカン公会議以前を知る信徒にはなつかしいと思う方もおられたと思います。なにより来る新年にはコロナが収束し思い切り祈り、聖歌が歌えますようにお祈りいたしました。

岩崎 千秋（北仙台教会）

註：第5地区の原稿は、2021年1月17日発行の「第5地区通信」より、転載いたしました。

第6地区より

〈一本杉教会〉クリスマスイルミネーション

教会の広場にイルミネーションを飾り始めたのは、2017年12月でした。その後1年ごとに光を増やしていきました。

一昨年は、近隣の方々を招いて、ミニコンサートと点灯式を行いました。

昨年は、さらにグレードアップして 12 月６日から１月９日まで、午後５時から 10 時まで点灯しました。コロナ禍の中で地域の方々をお招きすることもできませんでしたが、せめて、教会の前を通る方々が、明るい光で心を慰めることができればとの願いを込めて。

岩井　誠（一本杉教会）

〈元寺小路教会〉ミサ再開後の状況

当教会では、昨年コロナ禍の中約４か月のミサ・諸活動中止後、７月５日からミサを再開しました（今年１月24日～２月14 日も再度中止）が、現在は感染症対策ガイドラインを参考に換気、マスク、消毒、検温等々の対策を行っている他、大聖堂の席数を140人程度に制限し、それを超えた場合にはモニターを設置した小聖堂や信徒ホールにも席を用意してミサを行っています。

参加人数を制限して行われている大聖堂でのミサ

小聖堂と信徒ホールにモニターを設置してミサに参加した

ミサ以外の諸活動、行事については、その時の感染状況に応じて判断していますが、飲食を伴うものや密になりやすい総会、敬老会、バザー等の行事は全て中止している状況です。

齋藤　博和（元寺小路教会）

〈八木山教会〉
12月17日土曜学校「待降節祈りの集い」

クリスマス恒例の聖劇を今年は感染予防のために無観客で行いました。幼児２、小学生５、中高生、青年６、神父様、お母さん方、リーダーの 22 人が集まりました。子どもたちは一生懸命役を演じ、不思議な星役のフェルディ神父

様に導かれて幼子イエス様に会いに行くことができました。お祈りもそれぞれ自分の言葉でたくさん出て、祈りの必要な人々のためにみんなで祈ることができました。

（詳しくは八木山教会 facebook をご覧ください。）

佐々木　いづみ（八木山教会）

〈畳屋丁教会〉コロナ禍の降誕祭

教会の一昨年の馬小屋は大失敗。その反省を踏まえ、一昨年の降誕祭が終わり、いよいよ馬小屋を片付けるとなったとき、畳屋丁教会の像にふさわしく、教会にマッチし、幼稚園児にも興味を持って見てもらえる長持ちする馬小屋を作ることとしました。

馬小屋の基本設計は早々と聖堂に合わせて木造の和風の基本構造でできましたが、コロナウイルスの流行で材料の検討、調達が想定していたより遅くなり、今年ですべて完成させることはできませんでした。

また、今年も教会のモミの木を中心にイルミネーションの飾りつけを実施し、降誕祭終了後はモミの木だけ、コロナ禍の終息を願い、医療従事者をはじめとするコロナで苦しんでいる方々へのエールを込めて青色のLED電球を毎晩点灯しています。

原 尚幸（畳屋丁教会）

〈亘理教会〉
コロナ禍の中、亘理教会での「オリーブの会」

2020年5月、新型コロナウイルス感染の緊急事態宣言が解除された。

亘理教会も感染対策を実施し、聖体拝領そして、ミサ再開となった。そのような中、亘理教会では、被災者の方々が月１回集う八木山教会有志と協働で行う「オリーブの会」がある。被災者の方は「私たちは、どこにも行けず自粛疲れ、ぜひ再開してほしい」と、強い訴えがあり、その思いに寄り添い、感染対策をしっかり取ったうえ

で６月度より再開とした。テーブルに間仕切り（取り外し、折り畳みができる）とマスクで飛沫防止、換気、配置にも心掛けた。

「新型コロナウイルス感染症に苦しむ世界のための祈り」を唱えてから始める。昼食会や歌は取り止め、昼食は持ち帰ってもらう。このようにして月１回の「オリーブの会」は今も続けている。

長嶋 治夫（亘理教会）

信徒の声

以前、仙台教区に在籍していたインドラ・バーナード・クスマさんからの投稿です。

仙台教区青年育成会の外国人青年会員からの証し

私は、インドネシア出身のインドラ・バーナード・クスマと言います。現在31歳です。カトリック教会で幼児洗礼を受けました。

2018年3月に東北大学で化学の修士号と博士号を取得した後、DIC株式会社の主任研究員として採用されました。この会社には、外国人従業員はわずか2%だけで、私はその中のたった1人のインドネシア人です。

私の現在の住居は、当社の「中央研究所」がある千葉県佐倉市にあります。私は人生の３分の１を日本で過ごしました。アニメと特撮のファンの私にとって、日本は、子どもの頃からの夢の国でした。いわば、私は今まさに、その夢を生きているということです。

私は、日本に来る前に、インドネシアの最上位の大学の全課程とその他の課程をも達成して最優秀賞を取得し、卒業しました。私は日本語も日本の文化についても知識がなかったので、英語をベースにした修士課程と博士課程のプログラムを登録しました。

実際、私は、「ありがとう」と「すみません」と言う事しかできませんでした。

言語が不足していることは別として、私は数か月間、日常生活の中に適応していくために多くの困難に直面しました。

しかし、神様は私に親切でした。というのは、私は大学の日本人や外国人の友人、特に仙台教区のカトリック教会の各コミュニティーから多くの支援を受けたのです。

日本、特に仙台に到着して３日目、地図も日本語も分からないまま、独りで、元寺小路教会を探しました。それが私にとって日本での最初の日曜日ミサであり、日本のカトリック教会とのはじめての接点でした。カトリック信徒として、また科学者として育った私は、新しい場所に到着した時、日曜日であれば、先ず私たちの主に

敬意を払うことが、最初にすべきことであり、当然のことと思いました。

元寺小路、北仙台、一本杉、畳屋丁の各教会のコミュニティーとの関係は、さまざまな聖体祭儀(ミサ)に定期的に参加し、若者の集まり、ボランティア活動、黙想会、瞑想に積極的に参加したことにより、強化され、深まりました。しかし、私は当初、教会活動と修士課程と博士課程の研究を仕上げることのバランスを保つため、かなり苦労しました。

私は、一方を他方のために諦めたくはありませんでした。私は、科学者であるからと言って、カトリック信徒であることを犠牲にしたくありませんでした。私は常に「純粋な科学者」であり、「純粋なカトリック」であるというアイデンティティーの二つの側面を維持したいと考えていました。

私は子どもの頃、「科学」と「科学的考え方」に大きな影響を受けてきました。しかし、私は科学と宗教を統合するのに苦労したことはありませんでした。科学と宗教は二つの異なる存在ではないと私は信じています。実際、それらは互いに補完し合っています。私の研究実験の一つで、多大な努力と辛い仕事によって、新しい材料をうまく合成(「作成」)できたことを覚えています。この素材の特徴を詳しく観察した時、私は、その構造の美しさと素晴らしさに言葉で言い表せない畏敬の念を抱きました。その時の私の思いは、「わあ、私はこの素材を作れるほどすごいぞ！」という自画自賛ではなく、神の偉大さの前に謙虚にならざるを得ない自分の卑小さを感じました。

『神様！ あなたがこの美しい世界を創造なさるとは何と素晴らしいことでしょう！ 科学者としての私の手を通して、あなたの偉大さを発見でき、大変うれしく思います』

これは、私の科学的分野における多くの実践の中で得た一つの経験に過ぎませんが、科学と宗教は補完的な関係にあると言うことができます。

私が研究してきた数年の間、仙台教区の各教会でのミサ典礼や宗教活動の役割は、真の科学者として、また真のカトリック信徒として、私自身のバランスとアイデンティティーを保つのを助けてくれました。私は、今でも研究者としてのこの考え方を常に堅持しています。

私は、以下の最も影響力のある二人の科学者の思想と言葉、即ち、アイザック・ニュートンの『重力は惑星の動きを説明しますが、誰が惑星を動かしているのかを説明することはできません』という考えと言葉、また、アルバート・アインシュタインの『科学を勉強すればするほど、もっと私は神を信じるのです』という言葉と考えを、自分の思いと同じものとして共有しています。

私は、仙台教区の各教会のコミュニテイー、特に神言会のニコラス・コンデイ神父様や仙台カトリック青年会グループから頂いた支援に心から感謝しています。皆さんの絶えざる励ましと慰めのおかげで、私は兄の突然の死を、また、独力で日本語を学び、博士号を取得するなどの困難な時期を何とか乗り越えることができました。

日本においてはカトリック教会の人たちが私の家族であり、仙台は私の故郷であると実感しています。

私は今も、職場や地域社会で科学者であることと、カトリック信徒としてのバランスを保つという精神を持ち続けています。

会社の雑誌に「世界への架け橋」「架け橋の人」という題名で、わたしの記事が特集されていたことで、新しい場所に影響を与え始めたと思います。また、現在の住居では、千葉県のカトリック教会の人々と良好な関係を築いています。彼らは私を歓迎し、新しい環境での生活にすぐに慣れるように助けてくれました。

私がどこにいても、カトリック教会があれば、新しい環境にたやすく順応できると確信しています。なぜなら神様が私のために、それを準備してくださっているからです。

純粋な科学者として、真のカトリック信徒として、神の愛を広めていく私のミッションはこれからも　ますます続く・・・・

インドラ・バーナード・クスマ博士

訃　報

チャールズ・レンネル神父
（ベトレヘム外国宣教会　S.M.B.）

ベトレヘム外国宣教会司祭チャールズ・レンネル神父様が、2020年12月17日18時頃、スイスのベトレヘム外国宣教会本部にて、帰天いたしました。89歳でした。

レンネル神父様はスイスで司祭叙階され、1960年には日本に派遣、41年もの長い間働かれました。神父様の永遠の安息のためにお祈りください。

なお、葬儀ミサにつきましては、スイスのベトレヘム宣教会本部にて執り行われました。

〈略歴〉

1959年　司祭叙階
1960年　来日　東京フランシスコ会 日本語学校入学
1962年　四ツ家教会 助任司祭
1966年　病気療養のためスイスへ帰国
1970年　再来日 宮古教会 主任司祭
2001年　スイスへ帰国
2020年12月17日帰天 89歳

追悼：チャールズ・レンネル神父様

タルチシオ 菊地 功 東京大司教

ベトレヘム外国宣教会の宣教司祭であるチャールズ・レンネル神父様が、引退され過ごされていた故郷のスイスで、12月17日に89歳で帰天されました。

1931年（昭和6年）生まれのレンネル神父様は、59年にチューリヒ郊外のインメンゼーにあるベトレヘム外国宣教会で司祭として叙階。60年に来日し、日本語を学んだ後、62年（昭和37年）に岩手県の四ツ家教会の助任として赴任されました。当時、岩手県全域の宣教司牧は、ベトレヘム外国宣教会に委託されていました。そして1970年に岩手県の宮古教会に主任司祭として、また小百合幼稚園園長として赴任し、その後2001年にスイスへ帰国するまで、宮古で働かれました。

実はわたしは、生涯の中で、教会関係以外の場所に住んでいたことは２年しかありません。教会で生活するということは、そこの司祭館に住む司祭の生き様を日々目の当たりにしているということですから、さまざまな司祭からわたしは影響を受けていると思います。その中でもレンネル神父様は特別です。父の転職で盛岡を離れる69年まで、同じ四ツ家教会の敷地内で生活をしていました。単に生活をしていただけでなく、小学生になってからはほとんど毎朝、すぐ隣にあった盛岡白百合学園の修道院（現在の郵便局）へ、朝ミサに行くレンネル師に引きずられてミサにあずかり、うろ覚えのラテン語で侍者をさせられていました（ちょうど典礼が変わる時期でしたので、変化が大きくて閉口することも多々ありましたが）。ですからわたしの信仰の基礎を「厳しく」たたき込んでくださったのは、当時まだ青年宣教師だったレンネル神父様です。わたしが86年3月に名古屋で司祭叙階されて、その直後の復活祭に、宮古教会で初ミサをするよう招いてくださったのもレンネル神父様でした。幼い頃に生活しただけの生まれ故郷である宮古や宮古教会とわたしを、今に至るまで続く太い絆で結んでくださったは、レンネル神父様の心配りでありました。

レンネル師を知っている人はだれでも、神父様の笑顔とジョークとフレンドリーさを体験し、記憶しています。素晴らしい宣教師でした。レンネル神父様の宣教師としての大きな貢献に、神様が豊かに報い、永遠の安息の内に迎え入れてくださいますように。R.I.P.

（ブログ「司教の日記」1/5付 より抜粋）

レンネル神父様への思い

私たちの結婚式を挙げていただいた約50年前からの出会い、神父様のコック役を引き受けてからは教会とも神父様にもずっと近くに向き合うようになりました。

レンネル神父様はいつもにこやかな笑顔で、私の作る料理にも、掃除やその他の仕事にもほとんど文句も注意も言いませんでした。ただ時時他の人の口から私への不満？を聞くことがあり、自分は信頼されていないと悲しく思う時もありましたが、神父様の優しさだったのですね。10年間務めさせていただきました。

スイスへ帰られた後も、神父様への宮古教会の報告役として、教会報「漁火」の送付を続け、手紙そしてメールのやり取りで双方の様子を分かち合っていました。何人かの方々がスイスへ旅行されて神父様の案内で楽しい時間を過ごされた話題を聞き、自分もいつかは会いに行きたいと願っていました。2018年にほんの数時間でしたが、訪問、再会の願いがかなえられ、とってもうれしかったです。もう一度スイスに来ます！と約束し、次回はもっとゆっくり話をしたり、観光をしたいと願っていましたが、それはかなわない事になり残念です。

毎日夕に、第２の故郷・宮古教会のために祈りと祝福を送り続けてくださったレンネル神父様、自分の痛みをおしてまでも他人が喜ぶことをしてくださった優しいレンネル神父様に、いつものように、「感謝と祈りのうちに！宮古から」

伊藤　純子（宮古教会）

レンネル神父様とご聖体のイエズス様

私がレンネル神父様に初めてお会いしたのは36年くらい前でした。教会を長い間離れていてたくさんの罪で重い心でいた私が司祭館をお訪ねすると、にこやかに、それもすぐに告解に導いてくださいました。急な了承と行動に、実は大きな戸惑いと不安の中でのことでしたが、いつも重くのしかかっているたくさんの罪を涙を流しながら告解しました。優しく聞いてくださったレンネル神父が「我、御父と御子と御名によって汝の罪を赦します」と十字架のしるしをきったそのとたん、私の体中に不思議な感じがして、頭から足の先まで何か温かく優しい思いに包まれ、急に涙が突き上げてきました。そのあとご聖体のイエズス様を私の口にそっと入れてくださいました。イエズス様はずっと心深くおられます。

あの時の感慨、レンネル神父様のお姿、お心がいつも伝わってきます。天国へお帰りになっても、いつも私たちを案じながら見守ってください。ありがとうございました。

中村　美里子（宮古教会）

「園長先生、大好き！」

レンネル神父様は 1970年4月から2001年3月までの31年間 小百合幼稚園で園長をされていました。子どもたちや父兄にとって一番身近なスイス人であり、神父であり、園長として親しまれ慕われてきました。神父様は、子どもたちと一緒に遊びを楽しみ、その小さい人たちに心を寄せることができる方でした。あまりにもふざけ過ぎて先生たちからストップをかけられる事もありましたが、それは本気で子どもたちと遊びながら信頼関係を深めていた、みんなが大好きな園長先生の姿でした。いつも、あの茶目っ気のある笑顔で「どうですか？」と声をかけて私たち職員のことを気にかけてくださいました。今でも、神父様のあの笑顔が浮かんできます。

雨の日も、雪の日も門の前に立ち、子どもたちの登園を見守っていたレンネル神父様・・・

私も神父様の姿を思いながら毎朝門の前に立って子どもたちを迎え入れています。どうぞ神父様が大好きだった小百合幼稚園を、天国から見守っていてください。

小百合幼稚園園長　加藤　敏子（宮古教会）

思い出

何気なく〝コロナ禍〟のニュースを聞いている時、教会員から神父さまの訃報が知らされました。瞬間、遠く離れていても、あの大きな目をキョロキョロさせ　ほほ笑んでいる神父さまのお姿が脳裏に飛び込んできました。

一つの　思い出。
　当時は、教会婦人会の中でも高齢の方々が各家庭で毎月集まり、「信者として、余生をどのように過ごしたらよいか、等々」を神父様と共に話し合っていました。明治、大正生まれの方方のこと、何を話しても[第二次世界大戦]の経験につながります。神父様も、ご両親のことから、スイスでは・・、世界では・・、と歴史も広がり、大きな学びでもありました。そして締めくくりは、あのユーモアで笑わせ、安心させ、歌って、祈って、「今日はここまで！」と言って終了。なごやかな集まりでした。今は皆天の国の住人です。
　私ごとですが、両親共、レンネル神父様の大きな愛のもと、帰天の日まで導いていただき、安らかに旅立った事は、今でも大きな慰めです。
　30余年、主任司祭として私共をやさしく、時にきびしく、信仰への歩みへと導いてくださり、心から感謝いたします。

川井 治美（宮古教会）

司　祭　紹　介

佐藤 守也 神父

○生年月日
　1936年10月29日
○出 身 地
　宮城県仙台市
○司祭叙階
　1971年9月15日

司祭になりたいと思った動機（きっかけ）はどのようなことですか？

　私の父親は小学校4年の時に死んだ。その頃、近所のお姉さんが畳屋丁教会の日曜ミサに誘ってくれた。その頃のミサは司式司祭が後ろ向きでささげる形式だった。祭服は背中に刺しゅうがあって豪華なものだった。祈りや聖変化は後ろ向きでラテン語で唱えていた。子ども心に神父様には神様が見えるのだろうか、などと思った。私には「父が死んだ」というのはどこかに行ったのではないか、という気がして仕方がなかった。出棺の時、母が声をあげて泣いたので「死んだ」という意味を理解できなかった訳ではなかったが、「亡くなった」は存在しなくなったとは思いたくなかったのでしょう。でも「神父様には神様が見えるのですか」などと聞いたことはないのですが…。

　学生の頃、帰る途中ほとんど毎日教会に寄りました。祈るためというのではありませんでしたが、何となく寄りました。変な話ですが、神父様がいることを確かめて帰りました。そんな経験から、司祭というのは専従職員みたいなものだなと思った。そして今でもそう思うのです。神父様に会うのは事務室でしたが部屋には生活の匂いは全くなかった。そこでお茶をいただいたこともなかった。ラジオも物音ひとつしない部屋にポツンとおられたのです。口数の少ない神父様は何のことばものなく顔をあげて「あー」と言った切り後の言葉もありませんでした。私には司祭などは気後れさせるだけの遠い方でした。

　子どもの頃から、聖ベルナデッタが好きだった。聖ベルナデッタを思いながら司祭とつながっていたのです。今でも彼女のお姿は部屋の至る所にあって生きていた頃よりきれいな写真です。何年か前にヌベールで拝顔しました。
　もう一人私の信仰で忘れられない方がいる。それは聖ビアンネです。フランス大革命の３年前に生まれたが、その激動の中で読み書きは17歳になってからでその頃まで教育も秘跡にもあずかることもなかった。熱心な司祭やシスターが何人も断頭台に消えた時代。20歳の時、近くに赴任してきたバレー神父に出会い、そこで勉強して司祭になろうとしました。しかし、ナポレオン軍に召集されたり脱走したりして、再度召命に挑戦したのは25歳。でもとても勉強に追いつけず退学、農家の仕事に戻ったがあきらめきれず神父の指導で何とかリヨン大司教の計らいで条件付きの司祭になった。バレー師の指導を受け続けること、告解は聴かないことなどでした。ところが2年してバレー神父が他界。32歳の時人口250人の小さな教会アルスの主任になりました。そこで41年の司祭生活を送りました。いつの頃からか聖ビアンネのもとに告解に来る人が増えて1日なんと17時間も告白室にいたということです。晩年には１年間に10万人も

告解に来た。2〜3時間の睡眠で祈りと聴罪と本当に粗末な食事が彼の生活のすべてでした。
　聖ビアンネは「司祭の守護の聖人」ですが、晩年のことですが、３度ほど夜ひそかに家出したのだそうです。リヨンの修道院の戸を叩いたのです。入会を願ったのです。「教区司祭では救われない」と思っていたのだそうです。聖ビアンネには何年か前、アルスで拝顔しました。スータン、スルブリ、紫のストラをつけて私の告解を待っておられました。私は福音の続きを聖ベルナデッタや聖ビアンネに聴いているのだと思っています。私は救われない教区の司祭です。でも教区の司祭として生きています。受洗前と変わらない素朴な信仰を抱いて憧れています。

　一関教会にはハンガリーの聖エリザベトのご像もあります。４歳でドイツ中部チューリンゲンの次代城主の元に嫁ぎました。19歳で寡婦となり極貧の中で3人の子を育てながら23歳の短い生涯でした。長男はヘルマン2世となりました。城下の街はルターが聖書を独語に翻訳したアイゼナハで、彼の300年前のことです。
　教会も歴史も神さまが導いておられるのです。

堀江 節郎 神父
（イエズス会　S.J.）

○生年月日
　1939年12月31日
○出 身 地
　岩手県釜石市
○司祭叙階
　1970年3月14日
　東京カテドラル

神さまと私の履歴書
　私は2019年4月から仙台教区第3地区で働いています。東日本大震災に見舞われた沿岸地帯を希望したら、司教様から指定された町が釜石で、そこは私が生まれた町でもあります。４７年も日本の外にいたので、ふるさとと言われても、何となく全く新しい世界のような気もします。けれども、いつも海辺を歩くたびに司祭への召し出しのことが鮮明に思い出されてきます。

　司祭職への望みが心に湧き出てきたのは、この地方で宣教活動をしていたベトレヘム宣教会の司祭方との出会いでした。キリストのために命を賭けて生きている宣教師の姿を見て、そこにキリストの姿が重なっていきました。そして堅信を受けてからは、聖書の中のキリストがとても親しい友人のように間近かに感じられるようになったのです。15歳の頃でした。そして洗礼の父ヨセフ神父から、この町にはもう一人の隠れた宣教師がいることを聞きました。その名はリスパール神父。パリ外国宣教会の若い宣教師。彼は19世紀の末にこの地方を襲った大津波で流され、遺体はついに見つからなかったとのことです。神父がこのことを情熱的に語るのがとても印象的でした。それ以来私は深い湾になっている海辺を歩きながらこの宣教師のことを幾度も考えるようになりました。キリストの弟子として人々の救いのためにこの海に身を沈めたのか、自分も同じような道を歩みたいと思い始めたのです。当時のことを思い出すと、家族をはじめ、学校の教師や友人たちとの出会いなど、全てが神の方に向けて私をうながしていたのです。神様は具体的にはいろいろな人間との出会いによって呼びかけているのですね。神様の愛と人間の愛が織りなされて一人の司祭が生まれてきます。

　宣教師のイメージが心に刻まれたためか、私はやがてイエズス会に入会し司祭に叙階され、まもなくブラジルに派遣されました。ブラジルは移民の国と言われ、世界中の民族がそこに住んでいました。日本人などのアジア系の人々。大部分はヨーロッパ系ですが、アフリカから奴隷として連れてこられた人々の子孫もたくさんいました。どんな町にも貧民層のスラムが目立ち、差別社会の厳しさに圧倒されました。全く新しい世界にやって来た私は宣教師と言うよりも、人生学校の一生徒として働き始めたのです。驚いたことには、貧しい人々の密集する地域には活気にあふれた教会共同体があり、逆境に遭ってもくじけない勇気と愛にあふれた人々がいました。この人々（信徒）といつも、いつも、一緒に働くことの大切さをブラジルでの生活で学びました。喜びにあふれて彼らは繰り返し語っています。「キリスト者とは、キリストの弟子、宣教師だ」と。ですから私は彼らと共に働いたと言うよりも実に主と共に働いていたのです。

　年月が過ぎ老人になりましたが、もう一度新しい世界に旅発つように、日本の教会に戻ってきました。白髪になってもキリストのために働けるのはうれしいことです。司祭として大切にしたいことは、同労者としての信徒と手を取り合って働く事。なぜなら司祭も信徒も、洗礼の恵みによって一人残らず、キリストから福音宣教へと遣わされた弟子だからです。

2021年度　仙台教区 司祭派遣人事

太字：新任、転任

仙台教区本部	平賀　徹夫　名誉司教 使徒座管理者・教区事務局長：小松　史朗 教区会計：小野寺　洋一

地区	小教区	担当司祭	前職・前任地
第 1 地区	本町(松ヶ丘)、浪打、黒石、五所川原、弘前	**板垣　勤**（仙台教区） **パトリック・カストロベルデ**（淳心会）	第 8 地区 第 3 地区
第 2 地区	十和田(五戸)、三沢、八戸塩町、鮫町、野辺地、大湊、久慈	**ゲストヴェオ・ギャリー**（淳心会） **レクダク・ゲラドス・ジェリー**（淳心会）	第 3 地区 大阪教区姫路教会
第 3 地区	四ツ家、上堂、志家、花巻、北上、遠野、宮古、釜石、大船渡	**川崎　忠紀**（仙台教区） 堀江　節郎（イエズス会） 渡辺　彰宏（仙台教区）	第 8 地区
第 4 地区	気仙沼、水沢、一関、千厩、築館(新生園)、米川	佐藤　守也（仙台教区） 高橋　昌（仙台教区） ロペス・ホセ・アウセンシオ（グアダルペ宣教会）	
第 5 地区	古川、石巻、北仙台、東仙台、西仙台、塩釜	李　錫　イ　ソク（韓国光州教区） 川井　啓（小教区管理者） **メヒア・タデオ・ラファエル**（グアダルペ宣教会） 森田　直樹（京都教区） 兪　鍾弼　ユ　ジョンピル（ドミニコ会）	第 1 地区
第 6 地区	元寺小路、八木山、一本杉、畳屋丁、亘理、角田、大河原、白石、原町	小野寺　洋一（仙台教区） 幸田　和生　名誉司教（東京教区） 小松　史朗（仙台教区） 佐々木　博　協力司祭（仙台教区） **ミゲル・ヴァレラ**（グアダルペ宣教会）	第 1 地区
第 7 地区	会津若松、喜多方、南会津、松木町(桑折)、野田町	ノーサル・ヴァツラフ（サレジオ修道会） ボルデュック・エメ（ケベック外国宣教会）	
第 8 地区	二本松、須賀川、郡山、白河、いわき(湯本)	**会津　隆司**（仙台教区） **佐藤　修**（仙台教区） **マルコ・アントニオ・デ・ラ・ローサ**（グアダルペ宣教会）	第 5 地区 第 2 地区 第 2 地区

〈小教区以外〉

引退：鷹觜　達衛
　　土井　勝吾
　　首藤　正義

療養：氏家　和仁

〈離任〉

第 1 地区　カンデラリア・レネ（淳心会）　淳心会本部へ
第 5 地区　ファミニアラガオ・フェルディマール（神言会）　神言会本部へ
第 6 地区　トラン・ナム・フォン（神言会）　神言会本部へ
　　ロボ・フェリックス（神言会）　インドへ帰国
第 8 地区　狩浦　正義（名古屋教区）　名古屋教区へ

〈新任〉

第 2 地区　レクダク・ゲラドス・ジェリー（淳心会）　大阪教区から

編集後記

皆様のご苦労、お察しいたします。直接会うことがままならない現在だからこそ、教区報を通して言葉の交流が大切であると感じます。日常の信仰生活でのチョットした気づきなどなどを、教区報に反映させましょう。

仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は随時受け付けていますので、下記のメール宛てに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

（上野 隆）

sendaikyoukuho@gmail.com　　**次号発行予定日：8 月1 日(日)　原稿締め切り：5 月末日**